

(第5号様式)

学位論文審査の結果の要旨

氏名	Thiri Hmwe Maung Maung
審査委員	主査 市川 昌広 副査 松岡 淳 副査 増田 和也 副査 竹ノ内 徳人 副査 武藤 幸雄

論文名 Study on Rural Livelihood Diversification and Community Forestry Management in the Central Dry Zone, Myanmar (ミャンマー中央乾燥地農村における生計の多様化とコミュニティフォレストリー管理に関する研究)

審査結果の要旨

近年、ミャンマーでは、農村部の貧困とともに、森林劣化・減少が大きく進み課題となっている。コミュニティフォレストリー(CF)は、それら両者の課題解決を目的として1995年から実施されている。しかし、農村部住民の関心が低く、CF実施グループの活動も停滞しておりCFの国家目標には大きく届いていない。ミャンマーの中央乾燥地帯(CDZ)は、国内でCF総面積の40%以上が広がり、73,929世帯が恩恵を受けている。今日、農村住民が気候変動による災害や不安定な農産物市場に適応するためには、農村の生計多様化が進みつつある。このような状況下、本論文では、CFと生計多様化との関係、生計多様化にかかわるどのような要因がCFへの参加に関係しているのか、生計の立て方の変化はCF管理にかかわる制度にどう影響を与えているのかを検討することを目的としている。

第2章では、1995年から2023年5月までに発表されたミャンマーのCFに関する既存文献のキーワード分析をおこなった。CFへの参加に関する研究は、2011年ごろ以降からさかんにおこなわれるようになった。CFへの参加度が低く、CF利用者グループの不活発さが問題となる今日、いまだに重要な研究テーマである。ミャンマーにおけるCFに関する制度についての研究事例はいまだに少なく、CF利用者グループの活動を活発するために重要な研究テーマであることが明らかになった。

続いて、第3章と4章では、CDZに調査村を設定し、現地調査を実施した。調査方法は、189世帯を対象とした構造的質問紙調査、7回のキー・インフォーマント・インタビュー、5回のフォーカス・グループ・ディスカッションによる質的・量的調査を織り交ぜおこなった。

第3章では、調査村における生計多様化の状況と、CFが生計多様化とどのように関わっているのかについて明らかにした。調査結果から、生計の多様化は進んでおり、仕事は大きく農業、農業労働、非農業に分けられた。調査村ではCF世帯あるいは非CF世帯にかかわらず、とくに2010年代以降、生計の

多様化が進んでいることが分かった。ただし、CF 世帯と非 CF 世帯とでは多様化のあり方が異なっていた。CF 世帯では、非 CF 世帯と比べて、農業および農業労働収入が多く、非農業収入が少なく、生計の森林依存度が高い。森林を所有する CF 利用にとっては、生計多様化のために CF 管理が重要であることが明らかになった。

第 4 章では、生計多様化を含んだどのような社会経済要因が CF への参加に関係しているのかを明らかにした。調査村において CF への参加には、以下を含む 7 要因が関係していた。すなわち、慣習林の保有、家畜の所有、家族労働力、教育などである。CF 利用者グループ内の共同作業への参加には、家族労働力、村外就労、非農業収入の 3 要因が関係していた。調査村の CF 管理については、慣習林の所有の有無が CF への参加にかかわる最大の要因であるが、非農業収入の増加は CF への参加と CF 利用者グループ内の共同作業への参加の両者にネガティブな影響を及ぼしていた。CF に関する参加にとっては、農業に関連する収入が増加することが大切であるといえる。

第 5 章では、調査村での生計の立て方の変化が、CF 管理に関する制度にどのような影響を与えているかについて検討した。調査村には 8 つの CF 利用者グループがみられる。それぞれにおいて、ここ 10 年間の生計の立て方の変化について調査した。その結果は、3 グループが変化なし、2 グループがやや変化あり、3 グループが大きな変化ありであった。これらのグループごとに、オストロムの提案する制度の設計原則と比較した結果、生計の立て方が大きく変化したグループにおいても CF の制度に明らかに影響がみられたとは言えなかった。CF 制度への影響は、変化に適応したり、村の組織や制度が補完するなどによって軽減されていた。CF の制度の在り方には、グループのリーダーシップのあり方や、伝統的な慣習林管理のあり方も関係していた。

上記の結果をまとめ、本論文の結論を以下のようにまとめた。ミャンマーでは、とくに 2010 年ごろ以降に農村での生計多様化が進んできた。農業に加えて、農業労働に関係する仕事による多様化の方向が、非農業の仕事による多様化の方向よりも、農村の森林を含めた自然資源を保全しつつ、生計を安定・向上させるために望ましいことが分かった。農業労働の仕事による生計多様化は、CF への参加度を上げ、CF 管理にかかわるコミュニティの人材確保や制度作りに貢献する。今後も進行するであろう農村の生計多様化をうまく誘導しながら、適応的な CF 管理をおこなっていくことが望まれる。以上のように本論文は、農村における生計の多様化とコミュニティフォレストリー管理に関して、高い価値を有する結果を得られたと評価できる。

本論文に関する公開審査会は、令和 5 年 8 月 5 日に香川大学農学部で開催され、論文発表と質疑応答が行われた。引き続いて行われた学位論文審査委員会で、本論文の内容を慎重に審議した結果、審査委員全員一致して博士（農学）の学位を授与するものと判定した。